

『東 ・ 』北語韻書研究略史

著者	野間 晃
雑誌名	東北大学中国語学文学論集
巻	8
ページ	1-12
発行年	2003-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/48974

閩東・閩北語韻書研究略史

野間 晃

序.

本編は、閩東・閩東語音系を記述した韻書について、まずは福建における地方韻書の出現とそれ以後の歴史、次に閩語韻書の総合的な研究業績について振り返った上で、今までどのような研究が行われ、どのような研究成果をあげてきたのかについて、その概略を述べようとするものである。個々の韻書については、研究史にとどまらず、必要に応じその韻書の成立・編集法・内容などについても詳細に述べることとし、閩東・閩北語韻書の歴史そのものについても概観できるものとなるよう努めた。

福建省の閩語は伝統的に閩北・閩南の二大方言区に分けられて来たが、方言調査の進行により、①閩東（福州・福清・古田／福安・寧徳／福鼎）、②莆仙（莆田・仙游）、③閩南（廈門・泉州・漳州／龍岩・漳平／大田・尤溪）、④閩中（永安・三明・沙県）、⑤閩北（建甌・松溪・建陽）の五下位方言（括弧内の／はそれを更に下位区分したもの）に細分される様になった。1950年代末に行われた方言調査の報告書である、『福建省漢語方言概況』（討論稿）（1962）においてすでにこの区分法がとられており、以下の本論においても、この区分方法に従い、閩東・閩北地区の音系を記述した韻書について見てゆくこととする。福建省の閩語のうち、今のところ韻書の存在が確認されているのは、この2地区と、野間1998ですでに本編と同様の考察を行った閩南地区の、計3地区のみである。なお、以下の文中において論考を引用する際は、その著者名・出版年のみを記すこととする。詳細については、本編末の「引用文献」を参照されたい。

I. 福建における地方韻書の出現とその歴史

それではまず、福建における地方韻書の出現とそれ以後の歴史について振り返っておくことにしたい。

閩方言を記述した現存最古の韻書は、乾隆14（1749）年の序をもつ「戚林八音」と呼ばれる、『八音字義便覽』と『珠玉同聲』という、二種の福州語（閩東語）韻書を上下に配した合本であるが、そのうち前者の成立は16世紀後半にまで、後者の成立は17世紀後半にまで遡る可能性がある。

福建における地方韻書の編纂は、宋元以来の福建地区出身の音韻学者により理論的基礎が固められ、等韻学原理が普及していたこと、韻図・韻書に触れる機会が増加したこと、また民間における一種の反切語の通行などから編纂の条件が熟しており、それに商業や俗文学の発展などによる、社会的需要があいまって、読書人からは蔑まれていた地方音を記述した韻書が出現するに至ったものであると考えられる¹。純粹な韻図として現存最古のものである、泉州音系を記述した『拍掌知音』の成立も、『珠玉同聲』と同じく17世紀後半にまで遡る可能性がある。

その後「戚林八音」の編集法を踏襲したり、改良したりすることによって、福建各地の音系を記述した韻書が次々と現れた。まず閩北語建州（建甌）音系の『建州八音』（乾隆60（1795）年）が、閩南語のものとしては、泉州音系の『彙音妙悟』（嘉慶5（1800）年）が、そして『増註雅俗通十五音』（嘉慶23（1818）年）以降、“十五音”を書名に持った漳州音系の数多くの版本が現れ、20世紀に入ると、福建だけでなく、台湾の閩南語や広東の潮州語を記述した“十五音”も現れるようになった。以上の韻書の中には『拍掌知音』の編集法を取り入れ、編集方式の明瞭化、内容の簡略化と改良を行い、韻図の形態に近づいているものもある。

こうして福建地区の大衆は、礼品を積んでようやく文字にたどり着くという労苦から解放され²、方言文学だけでなく、古典を自らの母方言で読むことさえ可能になった。また私塾の教師達が行っていた様な、『康熙字典』の反切から難読字の読音を探り当てるという煩瑣かつ危険な作業を経なくても、一般大衆が正確な読音にたどり着くこともできるようにもなり³、“十五音”は社会の隅々にまで普及したのである。実はその私塾の教師達さえ、辛亥革命以前の漳州地区では皆座右に“十五音”を備え、いつでも学習者の質問に答えられる様にしていたという⁴。その後ローマ字などの表音文字や記号による閩南語の標音方式が考案されるにあたって、この“十五音”の成果が基礎となったのであった。また、これら表音文字による新しい標記法が普及した現在に至っても、例えば台湾においては、“十五音”の各種版本が出版され続け、その命脈を保っていることも指摘しておきたい。

“十五音”の名は、19世紀初めの漳州音系を記述した韻書に初めて用いられたものであって、「戚林八音」や『彙音妙悟』などには、“十五音”の名は見当らない。しかし後に至り、“十五音”は（声母が15であるということ）で名が体を表していること、漳州方言が泉州方言より習い易く、その流通範囲も広範であるなどの理由によって、閩南語の代表的韻書としての地位を確保し、遂には以上に紹介した福建方言を記述した地方韻書の総称とされるに至ったのである⁵。従って“十五音”という語は、「戚林八音」に始まる、閩語音を記述した福建の地方韻書としての、広義の“十五音”として用いられる場合と、『増註雅俗通十五音』に始まる、“十五音”を書名に持った漳州音系を専ら指している、狭義の“十五音”として用いられる場合がある。

Ⅱ. 閩語韻書の総合的研究

次に、数は多くないが、閩語韻書の総合的な研究業績について、振り返っておこう。

李新魁1983は、“上編”の“総論”において等韻学の基本的概念より説き起こし、等韻の起源と発展、等韻学理の研究と運用、そして古人が韻図を使用するために定めた法則である“門法”について概説する。そして下編においては数々の等韻図とそれが記述した音系について解説を加えているが、第十章の第二節「表現南方方音的等韻圖」では、「戚林八音」・『彙音妙悟』・『拍掌知音』・『擊掌知音』・『雅俗通十五音』・『潮聲十五音』の各韻書について、編者、成立の背景、版本、記述された音系の大要と特徴、声母・韻母の代表字選定の特徴、他書との継承関係を簡潔に述べている。

耿振生1992は、明清の等韻学に関する概論書であるが、まず等韻学研究の歴史を振り返り、次に等韻学の各理論の発展と継承関係に触れ、更に研究方法論を展開したあと、第四章の「明清等韻音系の分類和各類の大概面貌」において、各地区の等韻音系の中で閩音系を記述した嚆矢として「戚林八音」の『戚参軍八音字義便覧』の音系を、声母・韻母代表字に国際音標記号による推定音価を附して再構築し、現在の福州音系との相違、およびこれ以後の閩音系韻書の発展をそれらの内容の特徴と共に紹介している。第五章の「明清等韻音系舉要」においては、さらに『戚参軍八音字義便覧』のほか『珠玉同聲』・『拍掌知音』・『建州八音』・『彙音妙悟』・『雅俗通十五音』・『渡江書十五音』・『擊掌知音』・『潮語十五音』の計9書について著者、音系、記述された方言などを簡潔に紹介している。

李如龍1991は、管見の限り専門的に閩語韻書を紹介した唯一の論考である。まず中国の

大方言の中でも閩方言の韻書が一番種類も多く、編集の歴史も長く⁶、使用範囲も広くて、知られている韻書は21種類を数えることを指摘する⁷。そしてそれらを記述された方言によって、“一、閩東方言的韻書”、“二、閩北方言的韻書”、“三、閩南方言的韻書”に分け、更に個別の韻書について、成立の背景、編者、版本、継承関係にある文献、収録字の配列方法、声母・韻母・声調代表字とそれらの他文献および国際音標記号との対応関係、記述する音系と現代音系との相違点、内容の特色・長所・短所などについて簡潔に述べている。とりあげられている韻書および辞書は以下の計15種である：

“一、閩東方言的韻書”（計2種）

1. 「戚林八音」
2. 『加訂美全八音』（1906）⁸

“二、閩北方言的韻書”（計1種）

1. 『建州八音』⁹

“三、閩南方言的韻書”（計12種）

1. 『拍掌知音』
2. 『彙音妙悟』（以上泉州音）
3. 『雅俗通十五音』（以上漳州音）
4. 『擊掌知音』
5. 『八音定訣』
6. 『渡江書十五音』（以上廈門音）
7. 『潮聲十五音』
8. 『彙集雅俗通十五音全本』
9. 『潮語十五音』
10. 『潮聲十七音』
11. 『潮聲十八音』
12. 『新編潮汕方言十八音』（以上潮州音）

続く“四、閩方言韻書の源流”においては、閩方言の歴史を概観し、本来さげすまれて来た地方音が、福建に流れ込んだ俗文学の発展などにより、それを記述した韻書の社会的需要が出てくるようになった歴史的背景を振り返る。そして宋元以来の福建地区文士の音韻学に対する貢献を具体的に紹介し、彼らの開いた研究の伝統が、閩方言韻書の編纂にまず理論的基礎を築き、更に等韻原理の普及、韻図・韻書の経験で編纂の条件が成熟したことを論じ、文字の配列方法、注釈の方法、韻母代表字など、その影響の大きさについて閩方言韻書における実例をあげ詳述する。最後に“五、閩方言韻書の歴史価値”として、まず『彙音妙悟』と『美全八音』の序を紹介し、そこから大衆に奉仕するというこれら韻書の基本的性格を述べる。次に音系変化の記録、語彙資料および口語変化の記録、俗字の保存など、資料としての重要性を強調し、最後には『彙音妙悟』巻首の黄謙“三推新数法”¹⁰を表音文字化の先駆者として評価、また閩方言韻書の欠陥と使用上にあたっての注意を喚起し、今後も校注を附して出版を継続する必要性を論じている。

李如龍1991は、閩方言の韻書のうち、それらのうち主要なものの全てについて構成原理や音系を紹介してはいるが、あくまでも概説であり、閩方言の全容を探究するための指針を

示すに留まっている。ゆえに筆者は、本論文において閩方言の韻書から、それらを代表すると考えられる版本を選んで詳細に内容を検討し、閩方言の全容を解明する基礎的資料を作成しようと考えたのである。

Ⅱ. 本論

それでは本論に入り、閩東・閩北語韻書に関する研究業績について、振り返っておきたいと思う。閩東語は更に南北の下位方言に分けられるが、福州語はその南部の代表、福安語はその北部の代表である¹¹。ここでは福州語を記述した「戚林八音」、福安語を記述した『安腔八音』、そして閩北語を記述した『建州八音』について論ずる。

【1】「戚林八音」

「戚林八音」は、明末の将軍戚繼光編『八音字義便覧』と清の太史林碧山編『珠玉同聲』の二種の福州語韻書を上下に配した合本で、乾隆十四年（1749）の晉安による序がある。福建方言を記述した現存最古の韻書であるが、この合本の序からかつて二書は単独の形で存在していたことがわかる¹²。このあとに成立した建州（建甌）音系の『建州八音』（乾隆六十年・1795）や閩南語泉州音系の『彙音妙悟』（嘉慶五年・1800）などの地方韻書は、本書の編集法に倣って作成されたと思われる¹³。

許鈺1950は、「戚林八音」の内容を全般的に研究した論考として、管見の限りでは唯一のものである。福州方言の概説に始まり、『八音字義便覧』巻頭にある“嗽語法”（一種の反切法）に対する平易な解説、二書の声母・韻母に対する注音、二書の音節一覧表、福州音系と他方言・中古音系との対応関係一覧表等々、「戚林八音」の内容を全般的に研究している。ただ『八音字義便覧』と『珠玉同聲』の内容の相違点については残念ながら言及がない。

林寒生1985は、短編ではあるが、まず本書の序に関する紹介のあと、実際の編者に関する問題について、まず戚繼光は史書の記載に山東の出身者とあり、将軍として福建の地に赴き、その幕僚に音韻学者として著名な陳第がいたことをあげ、実際の編者ではあり得ないにしても、『八音字義便覧』の成立に大きな働きをしたことは間違いないとし、林碧山については、史書から福州籍の文人であることが分かり、『珠玉同聲』を編集したことは十分可能であったとしている。次に本書の体裁について述べ、合本を構成する二書それぞれの声母・韻母の代表字と声調代表字の二書間の対応関係について簡述し、本書の構成が

韻書と等韻図の良所を吸収したものであることを指摘、更に本書に倣って出現した閩方言の各地の韻書についてその概要を紹介して、最後には「戚林八音」の福州音系研究における資料的価値を指摘、現在福州音系との異同や、下位方言との対応関係、そして「戚林八音」における遺漏や誤記の実例をあげている。

鄒光椿1986は、本書の編者を専門的に探究した論考である。まず戚繼光がその出身地が山東であり、極めて多忙であったこと、それに音韻学者でもなかったことから、短時間で福州方言に通じ韻書を編集するに至る可能性のないこと、更にその生涯を詳細に日誌形式で記した『戚少保年譜』にさえ記載がないことから、戚繼光が『八音字義便覽』の編者では絶対にあり得ないと断言している。次に音韻学者で戚繼光の幕僚でもあった陳第が事実上の編者であるという説についても、陳第が戚繼光に会ったのは弱冠二十二歳の時であり、陳第の音韻学上の業績は老年に至って成ったものであることから、その可能性も否定している。林碧山は確かに福州の人ではあるが、『福州府志』の伝に同名の著書が見えないこと、長らく外地で官に任ぜられ最後は客死したこと、“太史林碧山先生”と自ら傲慢に記する筈がない¹⁴こと等から、この人も『珠玉同聲』の編者ではありえないと断ずる。そして両書とも著名人に名を借りた、多くの編者による共同作業で出来上がったものであると結論づけている。であるからこそ、内容が乱雑で、すでに存在していない韻部があったり、発音の記述が不正確であったりするのであり、特に『珠玉同聲』はその傾向が強いので、資料として扱う際には十分に注意すべきであると述べる。

李竹青1995も、本書の編者を専門的に探究した論考である。そこでは林寒生1985と鄒光椿1986の論考について、それらの論拠を批判的に紹介しているが、別の論拠より史書に見える戚繼光と陳第の“八音”は、民間において流通していた一種の反切語を軍隊における秘密伝令の手段としたものであって、近代においても社会の低層で行われていた一種の秘密反切語に類するものであろうとする。そしてその実例をあげ、「嗽語法」という一種の反切法が高級な文人の用いる様なものでなかったこと、また『八音字義便覽』の内容から、後に教養ある文人となった陳第が同書の編者であったことを否定する。また陳第の著作である『毛詩古音考』と『屈宋古音義』に反映される陳第の母方言の音系と、『八音字義便覽』の音系の相違点を具体的にあげ、これも陳第が『八音字義便覽』の編者でない証拠となるものであるとする。そして『八音字義便覽』の実際の編者は同書に“彙輯人”と記された蔡士汧であると推測する。その理由は、もともとこの様な方言字典の編者は、失意の文人の手になるものであって、方言字典も彼らの書と同じ様に無名のまま民間に流布し、民のために奉仕する様になる。従って、それらを集めた者が“彙輯人”即ち編者であると考えられるからである。同様に『珠玉同聲』の編者も、史書に同書を編纂したことを確認

できない林碧山ではなく、“彙輯人”の陳他であろうとしている。

張琨1989は、「戚林八音」の韻母が中古音系のどの韻母に対応するか、また中古音系の韻母が「戚林八音」のどの韻母に対応するかの相互関係について、それぞれ例字をあげながら、また文白異読にも留意しながら詳細に論じたものである。その結果の一つとして、現代の大多数の方言には見られない切韻の眞質：殷迄及び仙薛：元月の対立が、「戚林八音」の音系にはその痕跡を留めていること、また切韻と「戚林八音」の元 [ion]・魂 [uon]・痕 [on] という対応関係から、切韻における韻母の配列順序が説明できることを挙げている。

なお許・1950によると、福州音系を記述したものとして、「戚林八音」の他に『正音通俗表』という書があるというが、筆者は未見であり、管見の限りではこの書に関する論考も発表されていない¹⁶。

【2】『安腔八音』

『安腔八音』は、清代末年の福安語を記述したもので、陳登昆と陸尚淋によって編纂されたものであるという¹⁶。馬重奇2001は管見の限り本書の存在を初めて世に紹介したもので、まず本書が陳登昆の孫である福安範坑の人、陳祖蔚によって1953年に手写本が作られたものであり、福安図書館蔵、全七冊、封面と封底にはいずれも“四十七字母”と、“十七声母”¹⁷が記されていることを述べる。次に、“壹 《戚林八音》與《安腔八音》”においては、福安の歴史を簡述し、福安が閩東における政治・経済・文化の中心地の一つであって、福安語が閩東方言区北部では広く理解されている代表的方言であるとする。「戚林八音」の十五声母と本書の“十七声母”を比較し、「戚林八音」に見られない“如 [j]、無 [w]”は、他の閩東語にも見られない福安語だけの特徴で、呉語の影響を受けたものであるとする。韻母についても二書の代表字とその音価についての対照表を示し、福州語においては [-ŋ] と [-k] に合流してしまった鼻音と入声の韻尾が、本書の音系では [-m : -n : -ŋ] と [-p : -t : -k] の対立のまま残されていることを示す¹⁸。次に“貳 《安腔八音》與《簡易識字七音字彙》的比較”においては、すでに失われてしまったが、福安語の辞書であったとされる『簡易識字七音字彙』（編者鄭宜光、字一尘、鄭和善堂藏書、以下『七音字彙』と略称）の音系を、それを紹介した梁玉璋1983にもとづき、『安腔八音』の韻母・声母の音系およびそれらの代表字と比較しているが、『安腔八音』と『七音字彙』の相違点は、韻母について言えば、『安腔八音』に見られる「輝ui」韻部・「茄io」韻部が、『七音字彙』では現在の福安音系と同じく他の韻部に合併され消失していること、さらに『七音字彙』の「横uaŋ」韻部が、『安腔八音』には見られないという二点

だけであるとする。声母について言えば、いずれも十七声母をとり、その代表字は5つを除いて二書とも同じである。更に“参 《安腔八音》與現代福安方言比較”においては、各韻部の所属字について詳細に中古音系との対応関係をあげて、現代福安音系においては福州音系と同じ様に [-ŋ] と [-k] に合流してしまった鼻音韻尾と入声韻尾の対立は、『安腔八音』では混淆の兆しは見えるものの、基本的には保存されているが、中古音系との対応関係という点から言えば、必ずしもすっきりしない所も少なくないことを指摘している¹⁹。最後の“肆 『安腔八音』聲韻調系統及韻圖簡編”では、馬氏による声母・韻母・声調の推定音価を示して同書の音系を再構築し、更に『安腔八音』の音系が韻図形式により総観できる様になっている。

【3】『建州八音』

『建州八音』は建州（現建甌）音を記述した韻書で、乾隆60年（1795年）季秋月、玉融（福州府福清縣）の林瑞材（字正堅）による序がある。その序より「戚林八音」（乾隆14年・1749年序）の体例を模倣しながら、建州音を記述することに努めたものであることが分かる。

黄典誠1957は、本書の音系を研究した初めての論考である。本書を建甌方言を記述した資料として、声母・韻母の音価、音節表、北京音との対応関係、音系の特徴など、その内容を多岐にわたって詳説している。

潘渭水1986は短編ではあるが、本書の体裁、現在の建甌音系との差異、「戚林八音」の影響を受けた痕跡の実例、建甌における常用字で本書に収められていないものの実例など欠点の実例、内容に対する著者の評価などがまとめられ、すぐれた概説となっている。

張琨1988aは、『建州八音』の声調・声母・韻母の中古音との対応関係を実例を挙げながら解説している。声調については、中古音の平上去入の各声調が声母の清・全濁・次濁により、『建州八音』の八つの声調との間に複雑な対応関係を見せることを実例を挙げて提示し、それを声母や韻母に見られる階層性（文白異読などの一字多読）と関連づけることにより、声調には声母や韻母よりもさらに顕著な形で階層が認められるとしている。特に入声については三つの階層があるという。音系をはっきりと階層分けするところまでは行っていないが、声調の複雑な対応関係を解きほぐす示唆に富んだ論考であると考えられる。韻部の対応関係については、本書と中古音の双方向から詳細な検討を加えている。声母については、中古音から見た対応関係が文末で簡単に触れている。

張琨1988bは、1988aの声調に関する記述を更に詳細にしたもので、『建州八音』の各調類の中古音との複雑な対応関係を分かり易く図示し、中古音の清濁・四声に『建州八音』

の声調がどの様に対応するかを詳述している。調値・音価の再構築については、『建州八音』の成立から現在までに至るまでの間に二百年足らずしか経ていないため、音系に大きな変化は起こっていない筈であるという前提のもと、現代建甌音系によっている。

IV. まとめ

以上本論においては、福建地方における地方韻書の嚆矢となった閩東語の福州音を記述した「戚林八音」と、その体例を模倣しながら、閩北語の建州音を記述することに努めた『建州八音』に関する研究史を振り返った。「戚林八音」を構成する二書（『八音字義便覽』と『珠玉同聲』）は、閩語韻書には珍しく史書に名に見える人物の編集によるものとされ、それによると前者の成立は16世紀の後半、後者の成立は17世紀の後半にまで遡る可能性があるが、近年の編集者に関する考究は、それが仮託に過ぎないのではないかと疑いを持たせる根拠を、史書だけでなく韻書そのものの内容から提供していることを紹介したが、この様な問題についてはこれからも決定的な結論に達することは難しいのではないかと考えられる。編者について知られるところから、清代末年の閩東語の福安音を記述したと思われる『安腔八音』（出版年不詳）は、つい最近になってその手写本の存在が明らかにされたものであって、今後も同様の新資料の発見が期待される。また、序章で触れた福建方言の五大下位方言のうちの②莆仙（莆田・仙游）語、④閩中（永安・三明・沙県）語については、管見の限りその音系を記述した韻書の存在は報告されておらず、これらについても今後の探究が特に期待されるところである。

注

- 1 李如龍1991 “四、閩方言韻書の源流” p.136.
- 2 “是編（筆者：『閩音必辨』を指す）以字而正音，何如因音以識字，使農工商賈按卷而稽，無事載酒問字之勞乎。”（『彙音妙悟』の編者黃謙の自序。『閩音必辨』と『彙音妙悟』については、野間1998の“2. 泉州系韻書”を参照されたい。）
- 3 王育徳1987 p.170～171.
- 4 許長安/李熙泰1993 p.26.
- 5 王育徳1987 p.130～131.
- 6 南方方言に限るとしても、耿振生1992によれば、吳方言を忠実に記述した韻書『聲韻

- 會通』は、嘉靖19（1540）年にすでに編集されており、第2章における考察から分かる通り、明らかに『八音字義便覽』より少なくとも半世紀近く前には成立している。
- 7 21種が具体的にどの韻書を指すのかは、同論考中には具体的に述べられていない。ここに紹介されている韻書および辞書は、版本の違いを考えなければこのあと見てゆくように計15種類である。
- 8 本論考によると、アメリカ宣教師が編集し、1870年に初版が出版された、R. S. Maclay 著『Alphabetic Dictionary of the Foochow Dialect.』をローマ字化して改良し、更に合理的にしたものであるという。
- 9 ここにおいては、『建州八音』の音系とともに、1901年出版の教会ローマ字辞典である、C. White 著『A Chinese-English Dictionary of the Kien-ning Dialect.』の音系をあわせて紹介している。
- 10 野間2003の「I “切音新字”に至る閩南語標音法について」の“【1】三推新数法”を参照されたい。
- 11 以下の“【2】『安腔八音』”で引用する馬重奇2001による。
- 12 「國朝康熙字典、蒼萃群書、允稱翰府軌範。而求其便於齊民方言者、尤莫善於戚公之八音・林公之字義二書。顧是書也、歷時久遠、傳寫滋誤、彼此分行、搆覓維艱、識者憾之。今特重加校正、彙成一集、俾得互參便閱、不至傷於脫畧。」（序より）
- 13 野間1998の“2. 泉州系韻書”で述べたとおり、『彙音妙悟』の黄謙による序には、泉州の富知園先生による『閩音必辨』（佚）という韻書があったと記されているが、『彙音妙悟』と「戚林八音」との関係については全く触れられていない。しかし、第2章で述べる通り、私見では『彙音妙悟』は「戚林八音」の編集方法を踏襲していると考ええる。
- 14 『珠玉同聲』巻首に“太史林碧山先生”とある。
- 15 「要辨別福州方音，便得研究「戚林八音」和「正音通俗表」二書，而前者尤為重要。在福州一帶，牠是家喻戶曉的一部通俗字書。」（許鈺1950 p. 27）
- 16 本書は筆者未見であり、以下の記述は馬重奇2001による。なお二人の編者について同論考は、陳登昆の生没年は1882～1953、陸尚淋は不詳であること以外には何も言及していない。
- 17 四十七字母は：春花香、掀秋山。山坑開、嘉賓歡歌。須於金杯。孤燈砧牽、光川輝。燒銀恭缸根。俐東效、戈西鷄。茄聲、催初天。添饗迦歪、廳鉤煎。十七声母は：柳遑求氣低。波他爭時日。鶯蒙語出熹。如無。

- 18 梁玉璋1983によれば、これらの対立は現在の福安語では消滅し、福州語と同じ様になっているという。
- 19 同論考によれば、入声韻（中古音においても入声韻であるもの）のうち、『安腔八音』では声門閉鎖音 [-ʔ] であるものも、現代福安音系においては舌根閉鎖音 [-k] に変化している。

引用文献（著者名の日本語読みのアイウエオ順）

- ・王育徳1987：台湾語音の歴史的研究 第一書房（東京） 1987.
（東京大学博士論文 「閩音系研究」 1968.）
- ・許鈺1950：戚林八音的研究 「南洋学報」 第六卷 第二輯 1950.
- ・許長安/李熙泰1993（編著）：厦門語文 鷺江出版社 1993.12.
（第1章第2節 漳州《雅俗通十五音》）
- ・耿振生1992：明清等韻學通論 語文出版社 1992.9.
- ・黄典誠1957：建甌方言初探 「厦門大学学報」1. p.255～279 1957.
- ・鄒光椿1986：《戚林八音》作者初探 「福建師範大學學報」1986-2. p.84～86 1986.
- ・張琨1988a：讀建州八音 『中央研究院歷史語言研究所集刊』第59本 第1分
p.65～87 1988.3.
- ・張琨1988b：《建州八音》の聲調 『中国語文』1988-6. p.454～458 1988.11.
- ・張琨1989：讀戚林八音
「中央研究院歷史語言研究所集刊」第60本 第4分 p.877～887 1989.12.
- ・野間(晃)1998：閩南語韻書研究略史 「東北大学語学文学論集」第3号 1998.11
- ・野間(晃)2003：“切音新字”について
中國語學研究「開篇」VOL.22 p.303～321 2003.5
- ・潘渭水1986：建州八音剖析 『辭書研究』1986-5. p.110～112 1986.
- ・馬重奇2001：福建福安方言韻書《安腔八音》 「方言」2001-1 p.1～16 2001.2.
- ・李新魁1983：漢語等韻學 中華書局 1983.11.
- ・李如龍1991：閩方言的韻書 「地方文獻史料研究叢刊」2. p.127～140 1991.
- ・李竹青1995：《戚林八音》的作者、成書年代及其淵源
「中國語文研究」11. p.47～57 1995.10.
- ・梁玉璋1983：福安方言概述 「福建師範大學學報」1983-3. p.77～87 1983.

・ 林寒生1985：福州方言字典《戚林八音》述評

「辞書研究」1985-6. p. 95～100 1985. 11.

（本編は、東北大学博士論文『閩方言の文献学的研究序説』（2002年7月）の未発表部分である、「序章」および「第1章 閩語韻書研究史 I. 閩語韻書の総合的研究、II. 閩東・閩北語韻書に関する研究」を加筆訂正したものである。）